

---

# 金色の螺旋【黒獅子の涙】

河合空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

金色の螺旋【黒獅の泪】

### 【Nコード】

N6923C

### 【作者名】

河合空

### 【あらすじ】

旅の途中に寄った町でシンは『コクシ』という妖怪の言い伝えを耳にする。次の日、宿屋の息子イオの案内で入った森の中でその『コクシ』に遭遇してしまう。なんとか無事に町へ帰りついたものの、町の人から話を聞くと信じがたい答えが返ってきた。『コクシ』は存在しない、と…

## プロローグ（前書き）

拙い文章ですが、最後まで読んでいただけたら幸いです。

## プロローグ

夜の帳<sup>とばり</sup>が町を覆う

さあ物語の始まりだ

右手には血塗れのナイフ

左手には赤く染まったお人形

今夜は誰の番？

## 前編

「こんな満月の夜には“コクシ”が出るんだよ。」

頭上に広がる数多の星々を見上げて少年は教えてくれた。

二時の方角には真ん丸な月が見える。今日は雲一つなく、夜空を眺めるには申し分ない。町を一望することができるこの宿の屋根の上は月見には絶好の場所だと言えるだろう。

眼下に広がる町並みはまるで宝石をちりばめたかのように美しく光り輝いていた。

「“コクシ”って？」

旅人は尋ねた。黄金の瞳が優しく少年を見つめる。

「コクシはね、人を食べる妖怪なんだ。3メートルもある黒くて巨大な身体と金色の目が特徴で、掴まえた人間を頭から食べちゃうんだよ。」

まるで武勇伝を語るかのように少年は話す。

「そうなんだ。それは怖いね。」

「うん。でもね、ちゃんと弱点だってあるんだよ。」

「へえ、それはなんだい？」

誇らしげに語る少年に、旅人は首を傾げた。肩口まである旅人の漆黒の髪が揺れる。何故か横髪が不自然に長い。

「それはね、日の光なんだよ。コクシは太陽の下では生きていけないんだ。」

「でもそれだと夜はみんな隠れているしかないね。」

旅人がそういうと少年はまるで悪戯っ子のような笑みを浮かべて大丈夫だよ、と言った。

そして首から下げている皮の袋を手にとる。

「この中に入ってる陽の石は、太陽の光を蓄えておくことができるんだ。だから夜でも大丈夫なんだよ。」

「そうなんだ。じゃあ安心して寝られるね。」

少年は首を大きく縦に振り満面の笑みを作った。

「あ、そろそろ部屋に戻らないと母さんに怒られちゃう。」

少年は急いで立ち上がると梯子に足をかけた。

「夜は危ないからこれ貸してあげるよ。後からちゃんと返してね。」

そういつて少年は首から下げていた陽の石を旅人に投げて渡す。

「ありがとう。戻ったらすぐに返すよ。…じゃあおやすみなさい。」  
「おやすみなさい。」

元氣よくそう言う少年は梯子を伝い、屋根から降りていった。

「コクシ……か。」

旅人は少年から借りた小さな皮の袋を見つめて小さく呟いた。袋から石を取り出せば、強い光が闇に慣れた目を突き刺す。辺りはまるで昼間のように明るくなった。

闇に溶け込んでいた旅人のコートが光に照らされてその装飾が露あらわになる。

所々に独特な細かい紋様が施されたそれは一見地味ではあるが、その実かなり上質なものである。左手につけられている幾つかの指輪は華奢で優雅でおよそ旅をするものがつけるには似つかわしくない。

「さて……どう動きますか。」

旅人は不敵に笑むと石を袋に戻した。

「シン〜！こつち！！」

昨夜と変わらぬ笑顔で少年は旅人を呼ぶ。

「イオ、そんなに急ぐと危ないよ。」

シンと呼ばれた旅人は呆れつつも少年に付き合う。もうかれこれ1時間ほど山道を歩き続けていた。

「シンがのんびりしすぎなんだよ。あ、ほら、早く早く!!」

それでも急かすイオにシンは僅かに足を早める。険しい道程であったにも関わらず、シンの呼吸は少しも乱れていない。さらに道は細く険しくなっていく。

事の発端は今朝シンが教会の場所を聞いたことである。

どうせなら、とイオが町案内をかってでてくれたのだ。大して長く滞在する予定はなかったが、それでもイオがしたいというので頼むことにした。

子供ならではの視点で町を探索するのは新鮮味があつてなかなか楽しい。それに宿屋の息子だからなのか説明は丁寧でわかりやすかった。

しかし誰もこんなところにまで案内しろとは言っていない。

「ここだよ。さっき話してた祠。」

イオが案内してくれたのは古めかしい祠。少なくとも作られて三百年は経っているだろう。

その周辺には不思議な氣が漂っている。

「へえ、……これはかなり古い呪術だ。ほら、ここ。古代語で契約文が綴つづられてる。」

「何て書いてあるの？」

イオは興味深々に文字を見つめている。

「……我、ルカ・ルサの名に置いて……コ……なんだろう、読めないな。」

その部分は不自然に削られていて文字が判別できなくなっていた。

「コ……？コクシじゃないの？」

「どうだろう。…コクシは妖怪なんだろう？だから違うものだと思うんだけど。」

通常、妖怪と呼ばれるものは祠に封じない。祠には崇められるもの、つまり荒神や荒御霊あらみたまを封ずる。妖怪は樹や石、池などの自然の中に封じられるのだ。

一体この祠は何なのか。

読めない部分を飛ばして読み進めていく。

「……をここに封ずる。この地に天の祝福と地の恩恵があらんことを。」

遺跡などでよく見るものほとんど同じだ。ただ一つ奇妙なのは祠と呪おしの時代が一致しないこと。この形式の呪はおよそ五百年前に使われなくなっている。

「……イオはいつこの祠を見つけたの？」

「えっと……三ヶ月くらい前かな。コートと狩りにきたときに偶然見つけたんだ。」

コートとはイオが飼っている犬の名前だ。身体が大きくて力が強く、一般的に狩猟犬と呼ばれる種類である。

「……………」

暫く無言で思考を巡らせる。偶然で片付けてしまうにはあまりに一致しすぎていた。

シンはそつと祠に触れる。

その瞬間バチツという派手な音がしてシンの手が弾かれた。

「……？シン！！大丈夫？」

先ほどまで祠に夢中だったイオが驚いてシンの手を目を向ける。そこは血で真っ赤に染まっていた。

「……大丈夫、心配しないで。」

シンは汚れるから、と無事な左手でイオを遠ざけた。血が滴り落ちて地面に幾つもの赤い斑点を作る。予想以上に強い術にシンは眉を潜める。刻まれた契約文が欠けてもなお効力を失うことなく在り続ける。

（…………いや、これは二重呪だ。）

僅かだが違う呪の波動が感じられた。これだけ巧妙に編まれた二重呪は初めて見る。

しかし、こんな誰でも近寄れる祠に何故こんなにも強力な呪が施されているのか。

突然隣りにいるイオがシンのコートの袖をぐつと掴んだ。

「イオ……？」

イオは背後の鬱蒼<sup>うつそう</sup>と草木が生い茂る森の奥の何かを凝視していた。身体は震え、その顔には恐怖と驚愕<sup>きょうがく</sup>の色が映っている。身体を入れ替え、イオを庇うようにその何かと対峙する。

そこにあつたのは二つの金の瞳だった。

人の目にしては些<sup>いさ</sup>か位置が高過ぎる。地表からおよそ3メートルの高さにそれは浮かんでいた。よくよく目を凝らせばそこに人影のようなものが見えたが、光の届かない森の中ではその正体をはっきりと識別することはできない。

3メートルもある黒くて巨大な身体と金色の瞳  
：

不意に昨晚のイオの言葉が甦る。

（…こいつが“コクシ”……か。）

対峙してみれば、人々が畏れる<sup>おそ</sup>のも領けた。今まで気付かなかったことが不思議なくらいの威圧感を感じる。コクシの殺気がピリピリと肌を刺す。

（見逃して……くれるような雰囲気じゃないかな。）

小さく呪を唱えながら左手の人差し指と中指を袈裟<sup>けさ</sup>がけに振り下ろす。そこから鎌イタチが発生し、コクシに襲いかかる。風の刃がコクシの身体に届く直前、金属がぶつかるような甲高い音がしてシンの放った鎌イタチは跡形もなく消されてしまった。

「なっ……。」

コクシは体制を立て直す間を与えず、先ほどシンが作り出した鎌イタチと似たものを放つ。

「っ……シエルディア！！！」

シンは左手をかざし呪を叫んだ。その瞬間透明な盾が出現し二人を包み込む。

コクシの放った鎌イタチはその盾に当たって砕け散った。先ほどまで刃を作っていた風は四方八方に吹荒び、シンの長く黒いコートを大きくはためかせる。

（まずい……。）

砂埃が舞い、コクシの姿が隠れて行く。

砂が入らないように目を細め、全神経を前方にいるコクシに集中させる。冷たい汗が背中を伝った。果たしてイオを庇いながらどれだけ戦えるのか。

僅かな時間すらも永遠に感じられた。

やがて砂埃がおさまり、視界が開けてきた。

前方には鬱蒼うつそうと生い茂る樹々とどこまでも続く闇。

「…消えた……？」

どこを探してもあの黄金の目を見つけることはできなかった。

## 中編

「本当だつてば！！本当にコクシを見たんだよ。」

興奮しているイオに彼女は大きな溜め息をついた。彼女曰く、これで4度目らしい。

はいはい、と適当な相槌をうち再びシーツをたたみはじめた。長い黒髪を後ろで一つにまとめて仕事をこなす様は彼女を本来の年齢よりも若干上に見せた。

女手一つで子を育て、小さいながらも宿を切り盛りしてきたのだ。今まで気苦労も絶えなかったのだろう。

「嘘じゃないんだつてば！！シンだつてコクシ見たでしょ？」

「えっ、あ、うん。」

突然の振りに少々まごつきながらも肯定の言葉を返した。

その返答にほら見ろと言わんばかりにイオが母親に捲し立てる。

つい先ほど得体のしれない怪物にあったばかりだというのにこの勢いには驚かされる。子供ゆえの無邪気さなのだろうか。伝説上の生き物に会えたという体験がそれに襲われたという恐ろしい事実より勝っているようだ。

「イオ……今までもコクシに会ったことはあるの？」

「うん。さっきみたいに怖くはなかったんだけどね。」

「……………そのときのこと詳しく教えてくれる？」

「うん、いいよー!!」

母親に相手にされなかったのが気に食わなかったのか、シンの頼みをイオは二つ返事で引き受けた。

「最初はね、あの祠を初めて見つけたときだったんだ。」

場所をシンの部屋に移動するとイオはそう言って話を切り出した。小高い丘の上に建てられたこの宿の部屋の窓からは町の奥にある山が見える。その山の名はオウガ山。先ほどシン達がコクシに遭遇した山だ。

「クートを追いかけて山の奥に進んで行ったらあの祠を見つけて……なんでこんなところにあるんだろうって思ってた祠に触ったんだ。そしたら急にキーンって音が聞こえて周りの時間が止まったみたい。静かになったの。そして後ろを向いたら……。」

「コクシがいたんだね。」

イオはコクンと頷いた。

「でもさっきみたいに怖くなかったんだ。話しかけてくれたし……色んなこと教えてくれたし。あ、もしかしたら約束守らなかったこと怒ってるのかも……。」

「約束？」

「うん、満月の日だけなら遊びに来ていいって……何でなのかはわかんないけど。」

シンは考えこむように黙りこんだ。

話を聞く限りあの祠の封印を解いたのはイオで間違いはないのだから

う。しかし、この程度で解ける封印など施す意味はない。いつたいあの祠には何が奉られていたのか。

黄金の瞳に黒い巨大な身体。

オウガ山とコクシ。

巧妙に編まれた二重呪。

そして満月の日の約束。

「……コクシには何を教えてもらったの？」

「えっと、海の方この国の話とか魔法の話とか謳伽の話とか……。」

「……そっか。話してくれてありがとう。」

イオが部屋から出た後、シンはじっと窓の外を眺めていた。

紅茶の香りが辺りを包む。ともに出された焼きたてのクッキーはチョコチップとアーモンドの2種類。口に放り込めばほどよい甘さとサクサクとした食感が楽しめる。

「コクシはもういないですよ。」

紅茶を一口すすった後イルナはゆっくりと話した。

本来ならばこの時間は仕事に追われているはずだが、時期が時期なのでそんなに忙しくないのだという。今日の客はシンを含めて2人もう少しすれば西にあるキータニアのカーニバルに訪れる人で満室になるらしい。

「それはどういうことですか？」

イルナはにっこりと微笑んで手短に話してくれた。

「昔、この町はコクシのせいで荒れ果てていました。作物は食い荒らされ、家屋は壊され、人々は殺されて……。そんなとき東方からきた旅人が不思議な術を使いコクシを退治してしまったのです。」

もう一度紅茶を口に含む。その手はあれていて決して綺麗だとは言えなかった。

「それからはコクシは子供が夜遅くまで出歩かないようにするための怖い話として使われるようになりました。陽の石は道に迷ってしまったときに私たちがすぐ見つけることができるように持たせてるんです。『道に迷ったら陽の石を使いなさい。そうすればコクシはよってこれないから』って……。」

そこまで話し終わると彼女は小さく溜め息をついた。

「それなのにあの子ったらコクシに会ったなんて……。ごめんなさいね、子供のお遊びに付き合わせてしまつて。」

「いえ、……その旅人は何者だったのでしょうか？」

「さあ…、西へ旅立ったということ以外は何も……。」

「西…ですか。……わざわざ時間をとっていただきありがとうございます。」

にこつと微笑んで小さく頭を下げた。

シンは宿から出ると真っ直ぐある場所へ向かった。

それは町の西のはずれに建てられている。たいして大きくはないが、それでも威厳だけはしっかりと保たれていた。

古さのあまり多少開閉がスムーズにいかないドアを潜り抜け廊下を進む。再び現れた小さな扉を開くとそこには幾つもの本棚と、それを全て埋め尽くしている大量の本が広がっていた。

「おや、珍しいお客さんだね。ようこそ、我が図書館へ。何か調べ物かい？」

カウンターに座っているのは小柄で優しそうなおじいさんだった。茶色の縁のメガネの奥にある蘇芳色の双眸は穏やかに輝いている。既に八十は超えているのだろう。その顔には彼の生きてきた証だといわんばかりに沢山の皺が深く刻まれていた。

「コクシについて調べたいのですが、何か資料はありませんか？」

イオの話によるとこの老人は町一番の長寿であるにもかかわらずここにある本の情報全てを記憶しているのだという。老人はふむ、と呟いてそのしわしわの手であごに生えている白い髭を撫でた。

「コクシについて書かれている書物はここにはない。というより、この町にはそんなもの存在しないのじゃ。」

残念なことにな、と付け足して彼はふたたび髭を撫でた。

「じゃが、本はなくても話をしてやることはできる。…わしの話を聞くな？」

「はい、是非お願いします。」

軽く頭を下げると老人は小さく笑った。

「そう畏まらなくてもよい。さあ、あちらでお茶でも飲みながらゆっくり話そう。」

通されたのはこの図書館の中庭だった。小さいながらも手入れのされている庭は落ち着いた気分になさせてくれる。ちょうど庭の中心に椅子とテーブルがおいてあった。促されるままにそこへ座ると老人はどこからかお茶を取り出して淹れてくれた。

「コクシの話だったかの。お前さんはコクシについてどのくらい知っておるのじゃ？」

「黄金の瞳と3メートルほどもある黒い身体だということと、昔此処を訪れた旅人に退治されて今はいないことくらいしか…。」

「うむ、それは全部間違った情報じゃの。」

静かに、だがはっきりと老人は否定した。

「…？どういうことですか？」

「コクシの目は金色ではない。もちろん身体も黒くない。そして今でもコクシは存在する。…コクシの本当の正体はただのライオンじゃ。」

「ライオン…？しかし、この地域にライオンはいないはずですが。それに僕はイオと共にオウガ山で黒い身体で黄金の目の大きな妖怪に襲われました。…あれがコクシではないのでしょうか？」

その問いにも老人は静かに答えた。

「その昔、ある行商人がライオンを連れてこの町にやってきたのじゃ。お前さんが言うとおりこの付近にはライオンなぞおらん。じゃから町のは珍しさと怖いもの見たさでその行商人が泊まっていた宿に押しかけた。そのときなんの手違いがあつたのか、そのライオンが脱走してしまつての…。行商人は多くの傭兵と召使に探させただが、結局捕まえることはできなんだ。それどころか多くの死者が出てしもつてな。早々にその行商人は引き上げてしまつたのだ。その後、オウガ山に住み着いたライオンは時折人里に下りては人を襲うようになったのじゃ。……黒い身体の金を持つ妖怪に襲われたといったな？近くに古い祠があつただろう？」

「はい。…何故それを？」

怪訝そうな顔をして質問するシンを焦らすかのように老人はお茶を啜る。目尻の皺を更に増やして彼は再び口を開いた。

「コクシとは『黒獅』、つまり黒い獅子という意味じゃ。昔、此処に訪れた旅人は黄金の瞳に全身漆黒の衣をまとっていた。ちょうどお前さんのようにな。」

その部分に思わず両手を握り閉めた。その旅人こそがシンの探している人物に間違いない。ようやく見つけることのできた手がかりにはやる気持ちを抑えながら老人の話に耳を傾ける。

「その旅人は殺してしまったライオンの魂を近くにあった祠に祀つ

たそうじゃ。そして、不思議な術を使いそのライオンをオウガ山の守り主とした。そして、コクシが現れて不用意に人々を怖れさせないように封印を施したんじゃ。きつとお前さんたちが見たのはその守り主なんじゃろう。」

ホッホッホ、と軽く笑って老人は湯飲みに入っているお茶を全て飲み干した。

シンは視線を僅かに下げ、考え込むように押し黙った。今の話が真実だとするなら、あの殺気はなんだったのだろうか。それにイオの言っていた満月の夜の約束も不可解なままである。第一、何故イオが祠の封印を解くことができたのか。

「……あの祠の封印を解く鍵はなんなのかご存知ですか？」

「もちろんじゃ。この町のことでわしにわからんことはない。祠の鍵は町人じゃ。魔力を持っていないただの人が触れることによって封印は解かれる。封印から解かれたコクシはひたすら町人を守るためだけに戦う。」

気付けば老人の湯飲みには二杯目のお茶が淹れられていた。

「一つだけアドバイスをしてやろう。もし、次にコクシと対峙したならば心を静めて己を見つめるがいい。あれは鏡なのじゃ。」

「……??鏡？」

「そうじゃ。その意味がわかるときはすぐにくる。」

丁寧にお礼を言って図書館を出たときにはすでに日が暮れ、辺りは薄暗くなっていた。あれから三時間程度館内の本を見せてもらった中には見たこともないような呪術が記されている書物まであった。いつい長居してしまったが、この件に必要なになるだろう術は覚えた。とりあえず一度宿に戻るべきだろう。祠に行くにしても日が暮れてしまつてはただ危険なだけだ。情報はある程度そろつた。今為さなければならぬことも定まつた。あとはそれを為すだけ。

宿のドアを開けると、奥から慌てた様子でイルナが出てきた。

「イオ!!?つ……すみません…、あの、イオを見かけませんでしたか?」

「いえ、……どうかなさつたんですか?」

イルナは非常に落ち着きがなく、顔色もあまり良くない。よくよく見れば目が潤んでいる。イオの身に何かあつたのだろうか。

「シンさんがここを出られた後すぐにイオも飛び出してしまったのです。…コクシがいる証拠を持つてくるって言つてました。いつもなら暗くなる前に帰ってくるのに……。私が…、私があの子の話を信じないばかりに…。」

「イルナさん、落ち着いてください。」

イルナは今にも泣き出しそうだ。現在の時刻は七時半。シンが出て行つたあとすぐなら、イオが出て行つて既に四時間近く経っているわけだ。オウガ山に行つたのだとすれば確かに危険な状況に陥っているのかもしれない。

「いいですか、僕が今からイオを捜しにオウガ山に向かいます。イ

ルナさんは町の人たちを集めてイオの搜索に協力してもらってください。もしかしたら自力で戻ってくるかもしれないので、イルナさんは此处で待っているようにしてください。」

一通り指示を出し終えた後、シンはオウガ山へと走り出した。

（仮にあの祠へイオが向かったとしても、町人であるイオはコクシに襲われることはないはずだ。他の野生動物に襲われたか何らかの事故で動けなくなっているか…。）

何にしても自力で動くことができない状況にあるのかもしれない。

頭上には幾つかの星が瞬きだした。眼前に見える山はまるでシンを待ち受けているかのようにずっしりと佇んでいる。

その大きな闇に飲み込まれていくかのように漆黒の旅人の姿は見えなくなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6923c/>

---

金色の螺旋【黒獅子の涙】

2010年10月20日16時59分発行